

ユーザー 訪問

今回の訪問先は 日本ヴォパック川崎事業所様 です



日本ヴォパック川崎事業所全景



これまでユーザー訪問は化学・石油企業を対象にしてきましたが、今回は本格的なパブリックタンクターミナル会社としてわが国で最初に設立された日本ヴォパックです。日本ガテックスの社名は信頼のブランドとして広く知られておりましたが、2001年に現社名に変更しました。従来から経営の根幹に掲げてきた“安全 * 品質 * 環境”をより徹底して追求しています。川崎事業所では国内のみならず、海外製のドラム缶を幅広く取り扱っているという特徴があります。

日本ヴォパックの歴史、会社概要から聞かせてください
1966年(昭和41年)に本格的なパブリックタンクターミナル企業として日本で初めて設立された会社です。企業グループを超えて石油、化学などのユーザーとお付き合いするために、米国のGATX社と日本通運および神戸にタンクを保有していた長瀬産業の共同出資で設立されました。当時の社名は「日本ガテックス」で、神戸事業所に続いて、69年(昭和44年)に横浜事業所、73年(昭和48年)に川崎事業所を開設しました。当時はわが国の石油、石油化学などの高度成長期で、製品を積み込んだ船が港に到着

しているのに、まだタンクの溶接を行っているようなこともあったようで、タンクをいくら建設しても需要に応じきれないような幸せな時代でした。

会社の形態が大きく変わったのは2001年(平成13年)です。親会社のGATX社が経営資源をリース事業などキャピタル部門に集中することを目的に、ターミナル部門の売却を決定、アジアにおける事業はオランダに本拠を置く世界最大の液体化学品のロジステックス企業であるRoyal Vopak社に売却しました。この資本参加を契機に社名も「日本ヴォパック」に変更しました。

川崎事業所の特徴は

事業所は昭和電工がスチレンモノマーの生産を行っていた敷地ですが、生産撤退に伴い、その有効利用を図ることを目的に日本ガテックスと昭和電工の合弁事業として「昭和ガテックス」を設立したことに始まります。1995年(平成7年)に昭和電工は資本を撤退しましたが、現在も同じ敷地で操業しています。川崎事業所の最大の特徴は日本有数の石油化学コンビナートである川崎地区の中心部に立地しており、荷主となる化学会社などに隣接、一部はパイプラインも活用することで、輸送コストの削減が可能ということです。



取締役 技術部長
瀬戸 章二様



川崎事業所長
山本 和彦様

積極的な設備投資など、事業所の体質改善にも取り組んでいますか

取り扱い製品は99%液体化学品で、ユーザーは化学企業、商社、海外企業など約50社に達しています。保有するタンクは71基、総容量85,530KLで、このなかでステンスタックが16基あります。ステンスタックはここ2~3年間に10基ほど増設しました。また栈橋は30,600DWTと外航船の接岸が可能なことも特徴です。

ユーザー企業は敷地の有効利用、コストダウンを目的に自社タンクを極力減らしており、当社のようなターミナル会社にアウトソーシングする傾向にあります。現在のタンクの稼働率は90%以上を維持しています。消防法の規制で10年ごとの開放検査が必要なことを考えると、100%近い稼働率ということになります。

安全・品質・環境を重視した経営を掲げていますね

日本ガテックス時代の2000年(平成12年)に、タンクターミナル業界では初めてISO9001および14001の認証を取得するなど、安全・品質・環境に配慮した経営を一貫して追求してきました。

Vopakグループになって、危険物を取り扱う企業だけに安全・環境に対して、従来以上に厳しく対応すべきだという経営理念が徹底しています。事故やヒヤリハットが発生した場合は、24時間以内に本社に報告することが義務付けられております。事故事例はデータベース化されており、写真などを最大限活用して継続的改善に取り組んでいます。

日本ヴォパックでは、年に2回社長主催の安全会議を開催、Vopak社のデータベースやユーザーの化学企業の協力を得た事故事例の紹介や、その対策などを盛り込んだ従業員教育を行っています。また毎年7月には社長が参加した安全パトロールを10年以上実行しております。川崎事業所の独自の取り組みとしては、安全標語を従業員から募集して、そのポスターを事業所に掲示しています。

このほか、取り扱い化学品の品質管理では、製品の酸化防止や水分の混入を防止することを目的にした窒素シールを行うケースが増えております。環境対策としては構内から発生する廃水の処理を目的に中和反応・接触酸化装置を導入しました。規制からはそのまま放流可能ですが、環境改善のための自発的な取り組みです。



川崎事業所の設備概要

所在地	〒210-0865 神奈川県川崎市川崎区千鳥町2-2
	TEL 044-277-7411 / FAX 044-277-7235
敷地	42,187m ²
栈橋	1) 30,600DWT 全長171m 水深(干潮)10.4m 2) 2,500DWT 全長89m 水深(干潮)6.0m
タンク	71基 総容量85,530KL この内 ステンスタック16基
タンク1基の容量	45KL~4,850KL
危険品倉庫	2棟1,570m ² 、屋外貯蔵所145m ²
ローリー積場	12車線
ドラム充填場	充填機6基
トラックスケール	最大計量40トン・長さ15m1基
スチーム供給能力	5kg/cm ²
窒素ガス供給能力	毎時300Nm ³
分析室	各種分析試験機器

ドラム缶の使用状況を聞かせてください

物流の70～80%は船ですが、ローリー、ISOコンテナ、ドラム缶も相当使っております。ドラム缶の充てんは月間約3,400本で、2002年の実績は41,480本でした。ドラム缶の手当では荷主が行うことで、直接ドラム缶メーカーとの折衝はあまりありませんが、再生缶は使用していないこともあって品質上の問題はまったくありません。再生缶はコンタミの発生原因になる不純物が混入しているケースがあり、全品チェックが必要になっていましたが、新缶に関してはトラブルがなく、助かっております。直接手配はしませんが、日本のあらゆるメーカーのドラム缶を使用している経験からは、日本製の品質は世界一といっても過言ではないでしょう。

事業所には輸入ドラム缶が目立ちますね

充てんするドラム缶の月間約3,400本に加えて、3,500本程度のドラム缶を取り扱っております。輸入ドラム缶をそのまま出荷するケースのほか、ユーザーの要望でローリーに詰め替えてバルク化する作業があります。抜缶と呼んでおりますが、輸入ドラム缶はサイズにばらつきがあり、形状にも微妙な違いがあつて取り扱いに苦労します。

また、輸入ドラム缶は肉厚が日本品より薄いこともあって、リサイクルが難しいことから産業廃棄物として引き取ってもらう以外にありません。ポリエチレン製の輸入ドラム缶が増えていますが、この処分にも頭を痛めているのが実情です。

第2回
製造編

パール缶のお話し



前回は、印刷についてお話を致しましたので、今回は、製造についてご説明させていただきます。

需要家から、缶のご注文をいただきますと、数量・納期などについて打合わせを行い、直ちに製缶に取り掛かりますが、製造工程の概要は下図の通りです。

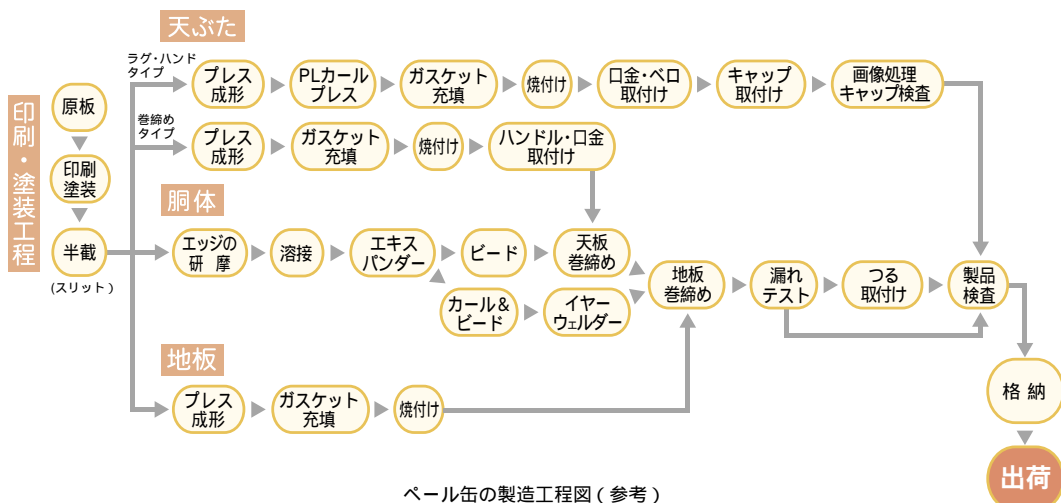
主材料の印刷板は、印刷会社から製造工場へ納品され、倉庫に保管しますが、胴板は、通常1,500枚(3,000缶分)単位で梱包されております。3,000缶未満になりますと、その都度梱包を開梱して必要枚数を取り出し、再梱包することになります。その場合、錆などの発生原因ともなり、錆のために印刷板が使用出来なくなった場合は、保証していただくこととなります。

また、缶の外面印刷は、基本デザインが同一で、部分表示が異なるものなど多様化しており、製缶ラインは、30～50缶/分のスピードで流れておりますので、目視による外観検査は判別が大変困難です。

そのため、工場では他品種(他印刷板)の混入防止対策として、製缶ロット毎に、印刷板の庫出し数量と、製品の仕上がり数量の確認作業を行い、確認後に次の缶の製造を開始することとしております。

1品種のご注文量が少ないと、製缶後のチェック作業回数が多くなり、作業時間のロスが増え、コストアップの要因となります。

パール缶製造上の課題のひとつは、印刷板から製缶をするため、小ロット製缶です。製缶作業をより効率化し、更なる生産性の向上を図るためには、需要家の皆様に、是非発注数量をまとめていただきますよう、ご理解とご協力を賜りたくお願い致します。



パール缶の製造工程図(参考)

業界動向

会員動向

- ▶ 平成15年4月1日付けで、川崎製鉄(株)とNKKが統合し、JFEスチール(株)が発足しました。これに伴い、NKKが工業会特別会員から退会し、川崎製鉄(株)がJFEスチール(株)と社名変更しました。これにより特別会員が1社減の3社となりました。
- ▶ 上記親会社の統合を受けてそれぞれの子会社である、川鉄コンテナ(株)と鋼管ドラム(株)が平成15年4月1日付けで合併し、JFEコンテナ(株)が発足しました。これに伴い、鋼管ドラム(株)が工業会正会員から退会し、川鉄コンテナ(株)がJFEコンテナ(株)と社名変更しました。これにより正会員が1社減の15社となりました。
斎藤ドラム缶工業(株)横浜工場は、高速道路(“横浜環状道路北線”)の高架工事にかかるため、平成14年6月操業を停止しました。

米国の業界動向

- ▶ IPANA設立について
米国ドラム缶工業会(Steel Shipping Container Institute:略称SSCI)は、平成14年12月、国際ファイバードラム協会(International Fibre Drum Institute:略称IFDI)、プラスチックドラム協会(Plastic Drum Institute:略称PDI)、中型容器工業会(Rigid Intermediate Bulk Container Association:略称RIBCA)と共同で北米産業容器同盟(Industrial Packaging Alliance of North America:略称IPANA)を設立しました。IPANAの事務所は米国ドラム缶工業会の事務所を使用、専務理事は同工業会前専務理事、マクケード氏(Mr. John A. McQuaid)です。
- ▶ トリラ・フェントン社設立について
米国ドラム缶工業会の会員であるシカゴのトリラ社(Trilla Steel Drum Corp.)とフェントン、ミズーリのネスコ社(Nesco Container Corp.)は、平成15年4月、100%子会社、トリラ・ネスコ社の設立について合意。4月7日から、トリラ・ネスコ社はミズーリ、フェントンの工場で55ガロン鋼製ドラムの製造を開始しました。社長兼CEOは、レスター・トリラ氏(トリラ社社長)。

ドラム缶から コラム感

新年度に思う

今年度もまたデフレによる景気低迷の中で明けた。この様な情勢下で現場をあずかる現役諸氏の御苦労に思いをさせつつ、今日日本を覆う閉塞感、不安感について考えてみた。

一口で言うならば、これらは全てこれまでの経済成長のため犠牲にしたリ、先送りして来た様々の事柄がここに来て一挙に浮き彫りになってきた故である。大は地球環境やエネルギー問題などグローバルな重大課題、又我々周辺の社会問題としても少子化や核家族化で家族の絆が急速に希薄になってきたうえ、企業は利益の減退を人減らして凌ごうとする。こう云う事が人々の不安感を醸し出す大きな原因となっていると思う。自分中心で相互扶助の義務を果そうとせず、従業員をコストとしか考えなくなった企業、こういった姿を誇りのある国の姿と言え

るであろうか。嘆かわしい限りである。

この様な状況を打破するには、技術によるブレークスルーしかない。幸い我国には環境や省エネ技術には高いポテンシャルがある。これらを柱とした技術立国を再構築すべきである。社会的にはNPO活動などを活性化させた新しい社会の枠組を作り、失われた公共性を回復すること、更に愛国、愛家庭、公共貢献を大切にするベースとしての教育改革を推し進めるべきであろう。

まだまだ我国には大きな底力がある。今なら経済、社会を立て直して新しいビジネスモデルを確立し、誇りある国家として国際社会に貢献出来る力は大いにある。

企業や個々人は自分の役割を見定め、しっかりとその責任を果すべきだ。

ドラム缶工業会第13代理事長
(平成4・6～6・6)
安藤 成海



平成14年度出荷実績と平成15年度需要見通し

平成14年度出荷実績

平成14年度の200Lドラムの出荷は13,590千本、対前年度9.7%の増と、年初の予想を大幅に上回る結果となりました。

新缶の出荷量としては、過去のピーク(平成2年度12,968千本)を凌ぐ高い水準であり、他産業で国内需要が低迷する中であって、量的には大変環境に恵まれた年であったといえます。

これは、ドラム需要の8割を占める化学分野で、中国、ASEAN向けを中心とする輸出需要が対前年10%も増加したことが最大の要因と言えます。

また、需要家の品質要求の厳格化にともない、更生缶から新缶へ一部シフトしたことも影響していると思われます。

中小型缶は、輸出の伸びに支えられ、薄鋼板の中小型缶で1,053千本、対前年度7.3%増と、近年の長期低落傾向に歯止めがかかった年でした。

ペール缶は、23,049千本と対前年度0.4%増加しました。全体の50.2%を占める主用途の石油向けは、他容器への切替えがあり、2.4%減になりました。又、全体の43.0%を占める化学向けは、IT関連がやや上向き、加えて輸出増により2.3%増となりました。

平成15年度見通し

平成15年度国内経済については建設をはじめ製造業も引き続き内需の低迷から脱しきれず、厳しい状況が続く模様です。

一方、化学を中心とする輸出の増勢は緩やかになるものの引き続き好調を維持すると見られます。ちなみに、今年のエチレン需要は708万トン(対前年度1.3%減)と予測されています。新缶需要としては、前年ほどの高水準は期待できないものの、12,900千本程度(対前年度5%減)と比較的底堅い需要が見込まれます。

ただ、輸出需要に支えられた好調であるだけに、今後の需要動向に対し慎重な構えで臨むことが必要かと思われます。

中小型缶は、全体としては横ばい基調ですが、輸出の先行き次第ではマイナス方向に振れる懸念があります。従って、平成14年度実績の約2%減の1,266千本程度(亜鉛鉄板缶、ステンレス缶を含む)と想定しております。

ペール缶需要は、22,550千本と前年度比2.2%減と予想されます。各需要分野共大きな期待は出来ません。

平成14年度缶種別・用途別出荷実績および平成15年度缶種別需要見通し

	平成14年度実績							平成15年度見通し			
	本数 (千本)	前年度比 (%)	用途別(本数)					トン数	本数 (千本)	前年度比 (%)	トン数
			石油	化学	塗料	食料品	その他				
200L缶	13,590	109.7	(111.0) 1,853	(108.8) 10,564	(116.0) 621	(98.9) 171	(128.5) 381	320,975	12,900	94.9	304,730
ペール缶	23,049	100.4	(97.6) 11,588	(102.3) 9,912	(120.7) 841		(101.4) 707	36,781	22,550	97.8	35,966
中小型缶	1,053	107.3	13	928	25	6	81	7,012	1,028	97.6	6,858
亜鉛鉄板缶	312	101.7		265	4	4	39	2,821	313	100.3	2,941
ステンレス缶	30	136.8		20	1	4	5	692	27	90.0	618
合計	38,034	103.8	13,454	21,689	1,492	185	1,213	368,281	36,818	96.8	351,113
前年度比(%)	103.8		106.1	108.0	116.7	100.9	125.4	108.4			95.3
構成比(%)			16.7	74.5	4.5	1.2	3.1	100.0			

(注) 1. 用途別200L、ペール缶の上段()は前年度比。 2. 前年度比、構成比はトン数ベース。
3. 薄鋼板のみ。亜鉛鉄板缶、ステンレス缶は200L、中小型缶を含む。

品種別出荷推移 本数

単位：千本

	7年度	8年度	9年度	10年度	11年度	12年度	13年度	14年度	15年度見通し
200L缶	11,636	12,142	12,454	11,380	12,419	12,849	12,386	13,590	12,900
ペール缶	25,474	25,711	25,662	24,079	24,928	24,775	22,952	23,049	22,550
中小型缶	1,201	1,186	1,197	1,042	1,134	1,113	981	1,053	1,028
亜鉛鉄板缶	318	357	336	337	320	315	307	312	313
ステンレス缶	21	23	22	29	32	38	22	30	27
合計	38,650	39,419	39,671	36,867	38,833	39,090	36,648	38,034	36,818



株式会社 東京ドラム罐製作所
代表取締役

中村 君子

イトーヨーカ堂は二坪の店舗から始まったといわれる。東京ドラム罐製作所は二畳のアパートから出発。その歴史は夫である中村福幸前社長と中村君子社長との夫婦善哉物語そのままだ。

中村夫妻と東京ドラム罐製作所の原点となる更生ドラム缶会社の朝日容器工業(株)は昨年で創業50周年を迎えたが、1984年設立の東京ドラム罐製作所は来年、創立20周年を迎える。中村社長は「お取引先に恵まれ、社員皆の力添えてここまでこれた」と、謙虚に語るが、一番は中村夫妻の頑張りの中村前社長のスピリッツ精神でけん引してきたことがあげられる。中村前社長が「新缶のドラムを絶対作る」との信念で、発足した会社だが、その中村前社長は昨年、他界し、中村君子社長が今、その役を務める。「時代の変遷に負けずに東京ドラム罐製作所の将来像を描きながら、前社長の意志をしっかり継いでいきたい」と、決意を胸に秘める。

幼少のころは

昭和8年4月29日生まれ。出身地は四国の徳島県半田町。町といっても私が生まれ育った土地は駅まで12kmも離れたところで、バス便もなく、どこへ行くにも徒歩という山奥で生まれ育ちました。小学2年生の時に父が兵隊に取られ、長女の私は、6人の子供と病弱な祖父を抱えた母を助けて勉強どころでは有りませんでした。家事の手伝い、そして野良仕事に追われる日々でしたが、このときの体験が粘り強い性格を育むのに役立ったように思っています。中学校時代は農作業の忙しい時など休んでばかりでしたが、女の子ということで、冬の三カ月間は裁縫学校に2年間行かせてもらいました。夜遅くまで一生懸命習い、そのお陰か、縫い物ならたいいのことは出来るようになり、今でも役だっています。

趣味は

読書ですが、最近は目の調子が良くないこともあり、少し遠ざかっています。最近、始めて5年になる園芸が何よれ楽しみです。とくに小さな苗から育てるのは格別で、手入れすればするだけ正直に育ててくれ、シーズンになると自宅周辺や屋上で所狭しと咲いています。また、55歳から始めたスキーは、転ばずに滑る程度ですが、毎年、冬には孫たちと一緒に出掛けるのを楽しみにしております。

信条(モットー)は

努力。根性。生涯をドラム缶にかける。
この道以外に我を生かす道なし、我この道を行く。

経営者のひとりとして、今の日本経済は

海外進出する企業が多く、日本の将来が心配です。何よれ付加価値のあるものを考えていかなければ、日本の産業は成り立たなくなるのではと心配です。また、日本企業の衰退が、当面の大きな政治、経済問題だと思います。資源のない国なので、どの国にも勝る技術をいち早く確立して、実用化、事業化して行くことの必要性を痛感しています。

製造業、建設業、流通業、金融機関など多くの分野で企業の合併・再生への動きが加速しています。中小企業にとっても、ここ数年は存続のため、これまで以上に経営者と企業の真価が問われていくことと思います。

会 員

JFEコンテナ(株) 協和容器(株) 斎藤ドラム缶工業(株) 山陽ドラム缶工業(株) 新邦工業(株) ダイカン(株)
大同鉄器(株) (株)東京ドラム罐製作所 東邦シートフレーム(株) (株)長尾製缶所 日鐵ドラム(株) (株)前田製作所
森島金属工業(株) (株)山本工作所 (株)ユニコン

《賛助会員》

エノモト工業(株) 三恵マツオ工業(株) 丹南工業(株) (株)大和鐵工所 三喜プレス工業(株) (株)城内製作所
東邦工板(株) (株)水上工作所

ドラム缶工業会 〒103-0025 東京都中央区日本橋茅場町3-2-10 (鉄鋼会館6階)

TEL 03-3669-5141 FAX 03-3669-2969

e-mail : drum.pail@jsda.gr.jp

URL : http://www.jsda.gr.jp/

ひびき

No.38 (平成15年5月28日発行)

発行人 ドラム缶工業会
専務理事 藤野 泰弘